



Title	犯罪者の自己辯護
Author(s)	佐藤, 昌彦
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 2, 175-189
Issue Date	1934-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/10609">http://hdl.handle.net/2115/10609</a>
Type	bulletin (article)
File Information	2_p175-189.pdf



[Instructions for use](#)

# 犯罪者の自己辯護

佐藤昌彦

犯罪者が自己の犯罪行爲に對して如何なる心理的態度を示すかは、犯罪者の性格、犯罪の種類如何に依つて一様に之を論ずるを得ないが、或種の心理的タイプに屬する犯罪者にあつては殆ど同様の心理的經過を取るものである。其の心理的タイプは假りに論理型とでも稱すべきもので此の型の犯罪者は自己の犯罪行爲に對して周到緻密なる論理を追つた自己辯護の論法を組立て、卒然として之に臨む時は、その行爲の非違法性を信ぜざるを得ざるに至るのである。但し犯行其物の計畫實行に至つては、其處に至る心理的經過の精緻に似ず極めてルーズであり容易に發覺逮捕を見る場合が多いが、其の犯行は論理的な思考の發展の結果である爲意外に重大なものであるのを通常とするのである。

斯く犯行其物が重大なるに拘らず發覺の豫防に對しては殆ど何等の考慮をめぐらさず、而もその犯行に至る自己辯護の過程は飽くまで周到巧妙である點に、此の種の犯罪者の特質が存するのである。即ち斯る犯罪者は心理的には全く孤獨であり、自己の住する社會の現實を理解するを得ず獨り自己の世界の中に其自身に於ては完全な

る生活を營んで居るものなのである。自己の住する社會と主觀的に自分自身の生活する世界とが全く別物である事を理解し得ず自己の空想に従つて外界の現實を構成する。故に自己の行動のドグマは完全に體系づけられるが現實が自己を如何に取扱ふか即ち具體的には犯罪が如何にして發覺し犯人が如何にして逮捕せられるか等については殆ど認識を缺いて居るものなのである。勿論敢て犯罪者と言はず現實が自己に取つて勝手の惡き時には出来る限り之を避け、或は進んで斯る現實其物を自己の主觀の中に於て改造する傾向は何人も有すると言ひ得るが、斯る傾向が此種の犯罪者にあつては止まる所なく發展し、最も信じ難き形態と迄展開するものなのである。

ジュール (Andr ens Bjerre) は其著「殺人の心理」(The Psychology of Murder) 中に於て斯る心理的特徴を自欺 (self-deception) と呼び自欺的殺人者の一例をあけて其の犯罪心理を説いて居るが、余は次にジュールのあげたる犯罪者假名ウインゲなる者を例に取り、斯る犯罪者が自己の犯罪行爲に對して如何に巧妙な論理を有する自己辯護を爲すものであるかを示し同時に斯る犯罪者の心理的特質を明かにしたいと思ふ。

殺人犯人ウインゲはスカンデナヴィヤの小都會の中流家庭に生れ相當の教育を受け故郷に於ては何等墮落の機會を有しなかつたのである。然るに十四歳の時商業學校へ通學の爲め故郷を去つて近傍の大都會に至つたが其處に於て通學の傍ら或る呉服商店の實務見習となつたのが彼の犯罪生活の第一歩であつた。彼は此の町に到着した其夜二人の同輩——一人は彼より數年年長の帳簿係りであり一人は同年輩のメツセンチャーボーイであつたが——に誘はれて事實は淫竇窟に外ならぬさる料理店に足を踏み入れ、多數の墮落仲間即ち下等なバリエテ藝人、無賴漢詐僞師等に紹介せられ爾後彼等を唯一の友としたのであつた。故郷の町に於て正しき生活を送つた彼れが何故

に一步家を立出づるや忽ち無頼漢の仲間入りをなすに至つたか。之に就いてウインゲの述ぶる所は斯る生活が如何にも魅力に満ち何人と雖もその誘惑に打ち勝つ事を得ないと言ふにあつたのである。彼が少年時代を送つた両親の家に於てはその生活は飽くまでも單調そのものであり灰色の退屈が生活をおほつて居たと彼は稱するのである。然るに事實は何等缺くる所なく清淨適當であつたのである。一年を通じて僅か數週間のみじめな夏季休暇に甘じて朝夕働き續ける彼の父、又子供や家事に追ひ立てられて居る彼の母を見る度に如何にもしてかゝる生活より逃れやうと言ふ考が彼を狂はしくしたものであつたが、さて一步父母の許を離れると、その當夜に於てさへ少年時代に夢みた華やかな世界が彼の眼前に展開せられたではないか。其處には最早や勤勞の重荷はなく、人はすべて來る日來る日を華々しき祝祭日と化して生を送るのである。灰色の世界から來た彼が此の美々しい世界に迷ひこまなかつたならばそれこそ不思議と言ふべきではないか。彼が斯る生活に踏み入つた事に對する自己辯護の第一線は以上の如きものであつたが、之のみでは完全ではない。何故ならば何人も氣付くが如く斯る彼の生活自體が若し非難せらるべき性質のものであるとしたならば、假令止むを得ず其處に陥つたものとしても生活其物の悪性は消失する事はないからである。即ち彼は彼の斯る生活の非難すべからざる所以を立證しなければならなかつたのである。之に對する論據を彼は斯る仲間と交る數ヶ月の間は彼は何等罪とせらるべき行爲を敢てなさなかつたと言ふ點に求めたのであつた。之等の賣笑婦、無頼漢、詐僞師等と生活を共にし、法を無視する彼等の所業を眼前に見ながら彼自身は敢て法を犯さなかつたのであるから彼には一向に責むべき所はないと言はなければならぬ。彼は真正直に額に汗して得た給料に依つて生活して居り、又彼の勤めは怠りなく果して居る（此點に

就ては彼の主人等の證言に依れば彼の勤務振りは満點であつたと言ふ。果して然らば彼も亦自ら得たる金錢を以て多少は人生を享樂し得る權利を有するものと言ふべきではなからうか。若し彼が他人の金の一錢だに必要としたならば彼は斯る場所へは再び足を踏み入れなかつたであらう。彼が折々彼の兩親に多少餘分の小使錢をせびらざるを得ず而も遂には大分の無理まで言はざるを得なかつたのは事實であり、之は彼も大いに恐縮する所であつた。然し若し兩親が事情を知り都會の生活に通じたならば彼等も彼を贅澤とは考へなかつたであらう。即ち兩親が彼の所業のすべてを是認したわけではなかつたのは彼も心を痛めたが、彼は考へた。一體老人は青年を理解し得られやうかと。時代は全く異つて居り又一方彼自身も友人との間や女達の家に於て頗る異なる趣味を持つては居たが、結局郷に入つては郷に従はざるを得ないではないか。又彼は世間を去つて隠者の生活を送る事は出来な。夫は彼の兩親が大いに望みを持つ彼の將來を破壊する事となるであらう。彼が世に出て一働きする爲めには友人が大いに必要である。然らばまた不快な事もあるが彼等と生活を共にする事こそ彼自身に取り又兩親に取つても寧ろ義務と言ふべきではなからうか。

以上の如き論法を用ひた末彼は十五歳の頃には全く安んじて魔窟の常客となり賣淫に依つて生活して居る者達と共に生活をして居たのであつた。

さて上述の如き彼自身の言に依れば非難せらるゝ事なき生活が數ヶ月續いたが、遂に彼の勤務に依つて得る正當な報酬を以てしては到底斯る生活を繼續せられざる状態となつた。遊蕩費の不足を補ふ爲に彼は先づ兩親を絞りつくし酒場からは借りられる丈は借り、又友人知己を借り倒し或は時には賭博に依つて囊中を満たしたり

した。があらゆる手段も盡き果て遂には酒場や魔窟の彼の生活を棄て去るか又は不正な手段に依つて彼の生活を持續するか、何れかに決心せざるを得ない日が到來したのであつた。此時こそ彼の生涯の分岐點であり彼の運命は此の時に於て定められたのであつた。彼は右すべきに左して罪の道に迷ひ入つたのであつた。但し其罪は左程重大なものではなく簡單な横領若くは窃盜にすぎなかつたが、彼の最初の犯罪である點に於て其處に至つた心理的經過は注目に値するのである。彼が雇はれて居たのは大きな卸商であつたが、小さな小賣店が夫れに附屬して居たのである。此の小賣店は彼と彼の二名の友人とが本務の傍ら管理して居たが、店主は事業上旅行勝ちであつて其の監督は極めてルーズであつた爲め之れを利用してウイングの二名の友人は過去數年に渡つて商品を盗み出して賣拂つて居たのであつた。此の秘密が彼れに二名の友人から打ち明けられた時彼の前には彼があればほど渴望して居る餘分の収入を得る途が開けたわけであつた。然し之に手を染める事は犯罪を行ふ事であり今まで陥つて居た遊蕩生活と比較にならぬ罪を犯す事である。犯罪ではなく單なる不道德にすぎない遊蕩生活に身を委ねる時に於てさへ彼を躊躇せしめ彼が之に對する充分な論法を編み出して之を征服する迄彼を苦しめた彼の道徳心は此時も尙嚴として存して居たから彼は容易に此の新らしい罪に手を染むる事を得なかつたのである。然しながら此の道徳心は最初の時程強力ではなく彼の酒場魔窟の生活、犯罪者との交際に依つて次第に刈り盡され之を説服する事は左程難事ではなかつた。即ち何人も同じ事をやつて居ると言ふ事及び彼れが全然孤獨に陥らぬのは彼の將來に取つて缺くべからざる事であると言ふ事、此の二つの論法は最初の場合より一層強力に彼の道徳心をくらましたのであつた。先づ彼の知己の中には今彼が犯さんとする取るに足りぬ使ひ込み等より數倍重い悪事を犯さぬ

者としてはなかつたのであるから、彼獨りあらゆる法律に依つて抑制せらるべきであらうか。又次ぎに今彼が彼の周囲と絶縁したならば彼の將來はどうであらう。何人も彼を助けず彼は一生涯下つ端の帳簿係りとして奴隷の生活を送るにすぎない事となるであらう。之れこそ彼の兩親の胸を痛める事なのである。彼は幼い時から彼等の最愛の希望ではなかつたか、そして今日と雖も彼等は彼にあらゆる榮達の道を考へつゝあるのではないか。徳は夫自身酬ひである等と言ふ諺が何であらう。斯る日曜學校の片言と實世間とがどんなに違つたものかは、多少でも氣の利いた人間ならば誰でも知つて居る。自ら運命を開拓した町の金持の誰でも僅かな金をくすねたのが抑々の首途なのだ。然し以上の論法を以てしてはまだ彼のなさんとする行動の正當性を裏書きするわけにはいかないのは明かであるから、彼は更に進んで彼自身の見地に基く彼自身の其の場合にのみ妥當(?)する犯罪觀を樹立するに至つた。即ち彼がなさんとする如き小額の而も餘分な金錢を己が物としたとて何人も損害を受くる事はないと言ふのである。彼が隠匿したガラクタは店の事を一向顧みない主人に取つては無いも同様なものである。寧ろ物が其の處を得たのを知つたならば主人は彼等を祝福したかも知れないのである。そして假令費消金額が繼續多額となつた所で其は一向主人に迷惑は及ぼさないのである。何故ならば彼は他日富を得て之を以て主人に返済するからである。彼が富を得る事も彼の勤勉(之は何人も證明する)を以てすれば火を見るより明かである。斯く考へるならば一体只何か無意味な法律があると言ふ丈けで青年の享樂を自ら棄て去り、成功への道を自ら阻む權利が彼に有り得やうか。而もその法律たるや此場合の事を言つて居るのではないではないか。斯くして彼の良心は破れ去り彼の最初の犯罪は行はれたのであつた。

上述の如き生活を繼續する事兩三年の後、ウインゲは職を轉じた爲め最早や以前の如き餘分の收入を得られざるに至つた。然し彼は彼の生活を變更しやうとはしなかつたので他に收入の途を講ぜざるを得ない事となつた。此の爲に彼は更に一つの罪を重ねるに至つたのであるが、今度の罪は犯罪ではなく寧ろ道德的見地から非難せらるべき性質のものであつた、即ち賣笑婦より金を貰つて生活する事が夫れであつた。

斯の如き生活は彼の考に依れば別に罰せらるべき程の罪ではなく何人に對しても淡白に打明け得るものであつた。彼は勿論彼以外の者と雖も極めて嫉妬深かからざる限り斯る行爲を以て道德的に非難すべきものとはしないと言ふのが彼の意見であつた。但し之れは一般論ではあるが彼の場合は特に許さるべき理由があつた。と言ふのは賣笑婦等は長い間彼の間抜けのおかけを以て彼を絞り得たのであつたから偶々彼が窮乏の折は、彼の爲めに飲食代を支拂ひ、バリエテの入場料を支拂つて呉れてもいゝわけなのである。それのみか彼が斯く窮乏するに至つたのもとはと言へば彼女等の爲ではないか。斯く考へて彼は最初の間は彼女等に立替へさせた金錢を一錢のこらず返済したにも拘らず後には平然と彼女等から金を借り出し時としては貸す事を欲せぬ者に對しては、手あらかな振舞に及ぶ事さえあるに至つた。彼も彼女等の爲めには随分痛い目にあつて居るのであるから、之れ位の事は良からうではないか。それのみか彼は彼女等の爲めに毎日大いに役に立つて居り彼女等が到底返済し得ぬ程の間と努力とを彼女等に捧けて居たのである。彼女等は警官や客に對する關係上又特に彼女等にかたがるより能のない無頼漢に對する關係からも、彼なしにはやつて行けなかつたのである。彼が斯る惡漢の手から救つた女も尠くなかつた。彼は彼女等を其の運命に委ね、只彼が彼女等と生活するに足る給料を得て居ないと言ふ理由の下に彼



女等を非命の淵に沈むべきであつたらうか。彼女等が頼むべき者が無い時に彼女等を助ける事こそ寧ろ彼の義務ではなかつたらうか。然らば彼こそ賣笑婦の犠牲的保護者として氣高き一役を果した者と言はるべきではあるまいか。以上の如き彼の論法は何處に誤謬があるか。要するに斯の如き意見を抱くと言ふ事自體に誤りがあり、彼は置くべからざる所に其の出發點を置いて居るのである。然し一旦出發した後は彼の論理は正確に運ばれて居り誤れる社會の中の正しき（論理の上に於てのみ）世界を形づくつて居る點に彼の心理的特質が示されて居るのである。斯くして彼は十七、八歳の頃には魔窟の常客であり窃盜である外全く安んじて賣笑婦より金を貰ふ生活を開始したのであつた。

右の如き生活は其自身としては動きのないものであつて、金の手蔓が切れるか或は他の事由でも發生しない限り彼の生活には變化は來らないものである。此のまゝ繼續するならば彼は新らしき罪を重ねる事もあり得なかつたであらうと考へられる。然るに事は意外の方面から進展し彼は容易ならぬ大罪を犯す事となつたのである。其の罪は若し彼が無能であつて僅かに彼の勤務を糊塗し得る程度の間であつたならば恐らくは起り得なかつたであらうと思はれるものであつた。即ち彼が持つた彼の將來に對する野望が其の基をなしたのであつた。彼は故郷の學校の校長が證明する如き優れた才能を有し又勤務先きに於ては極めて勤勉であつた、要するに彼が同輩より斷然頭角をあらはして居た事は確實であつて彼の最後の雇主の如きは彼の爲めに大金を拐帶逃走せられたにも拘らず、彼の勤務振りにほれこみ彼に對する死刑の宣告に對して減刑の嘆願書を差出して居るを以ても之を知る事を得る。斯く其の雇主に重要視せられる才能ある青年が其の將來に對して輝やかしき希望を持つのは寧ろ當然で

あつて、彼も亦彼れの將來の成功を華々しく夢想したのであつた。若し彼が凡庸の青年であつたならばかくまでの夢想は抱かなかつたであらうが、彼の才能と勤勉は彼の野心の拍車となり、彼の野望は止め途なく驅り立てられたのであつた。夫は聊か常規を逸した程度のものであつたが、其れのみを以てしては何等有害なものではなかつた。然し彼が之を當座の現實と結び付けた所に大きな誤りがあつたのであつた。茲にも彼が現實を現實として理解する事の出来ない事が暴露せられる。即ち彼は早急な成功を夢み之を實現出来るものと信じたのであつた。此の爲めに彼は十五歳から二十歳までの間に十回以上も其の職を換へたのである。その何れの地位も多大の勤勉と優れた才能を以て完全に果した事は言ふ迄もないが、彼が職を求めたのは其に依つて急速な成功を得んとするにあつたのであるから、何れの地位と雖も之を彼に與へるものはあり得る道理がないではないか。彼の抱いた野望と言ふのは彼の優れた才能の力に依つて（之は事實であるが）數年の間に商會の樞要な地位を占め、富豪と婚を結び多數の銀行と取引し新事業を開始し斯くして巨富を得ると言ふのであつたから、斯る野望の實現を目的として新地位を得たとて其れが現實との接觸に依つて忽ち崩壊するのは當然の話と言はなければならない。而も彼は倦む事なく此の野望を固執し爲めに職を換ふる事十度以上に及んだのである。職を換ふる度に新らしき熱心を以て職務に勉勵したのであるが、一方彼の遊蕩生活は依然として繼續して居たのであるから人は彼の精力の異常に強力な事に驚嘆するであらう。之は彼の體格が異常に頑強であつた事も一理由であるが心理的には燃ゆる野望が彼を煽り立て、居たからであつた。然し斯る生活が彼の肉體力並びに精神力を急速に荒廢せしむる事は當然であつて此時期に至つては彼の理性の力は微弱となり以前の如き正確な論理力は姿を消しつゝあつた。即ち彼の野

望の中から烈しき熱情が生れ出で此の熱情が彼を驅つて其の野望を更に増大せしめ、又一步を進めて夫の實現に着手せしむるのであり着手してからの道程に於てこそ論理の運びは見られるが、出發點に於て一大飛躍をなして居るのであつて、第一第二の場合に於ては第一步から正しき良心に基いて論理を運んだのに比較すれば彼が道徳心と共に論理力をも失ひつゝある事を知るを得るのである。又第三の場合より一層その頽廢の度は高まつて來たのであつた。彼の事業の成功に對する野望は増大し驚くべき大事業が計畫せられ——但し其の精細な内容に至つては彼は其の不可能なるを悟らざるを得ないのを恐れ之を明かにはしなかつたが——又一方には彼の異常な劇務に對する慰安として缺くべからざる華やかな遊蕩が夢みられたのであつた。其の空想は如何にもグロテスクなものであり、若き犯罪者が其の腦裡に好んで描く人間野望の好個のカリカチュアであつたのである。然し斯る野望が彼の當時の生活範圍に於ては到底實現し能はぬ事を時を経るに及んで彼は悟つたのであつた。賣笑婦の間に伍して單調な生活を送り又愚にもつかぬオフィス仕事（かつてはあれほどまで熱心に行つた彼の職務である）に埋もれて居ては、只成功の夢に身をさいなまれるに止まり成功の榮冠は永久に彼にはさづけられはしないのである。今や彼の目は開け彼が今まで無價値な日陰の生活を送り、彼の最良の力が愚かな逡巡に依つて息の根を止められて空しく裏町の汚穢裡に浪費せられた事實を賢くも悟るに至つた。今は過去のすべてを振りすて雄々しく立上るべき時である。彼には目的を達するに充分な力があり、又其の力を燃やす油なる熱情と更に神のみ之を知る烈々たる野望を有するのである。それにも拘らず彼が此の五ヶ年の間に何の進境も見なかつたのであるから、夫は彼の罪ではなく彼の周圍の罪であると言はざるを得ないではないか（何故にかゝる罪ある周圍に陥つたかも

彼の罪ではないのだ。然らば若し彼が奮起して狭少なる周圍と絶縁しさへすれば、そしてあの華やかな外國に至つたならば、彼の運命は立ちどころに開けるのである。世界の何れの首都に於ても彼を迎へる手を見出し得るのである。ロンドン、パリ、ベルリン、ニューヨークの生活は如何に華やかなものであらうか。彼は彼より幸運な年長の友から、彼等が之等の場所ですつた摩訶不思議とも言ふべき生活、御伽話めいた美々しいレストラント廣大な劇場、世界中から集まつた數百の美姫に充ちた豪華な家の事を聞かされたものであつたが、其の思ひ出は彼には激怒をもたらしたのである。何故に彼は甘じて彼の生涯の最大の五年を否彼の青春のすべてを空しくみじめな井蛙となつて飽くまでむさほり得べき豪華を傍觀して居たのであつたか。彼を引き止めて辛苦を味はしめた彼の両親や其他の者に對しては、たとへ之等の年月の間に青年の享樂を（彼の享樂觀は増大して居る）失つた事は之を宥すとしても、職と成功の機會を失つた事は之は宥すわけにはいかない。成功と富、あまねき榮譽、尊敬と何物をも購ひ得る富とが彼の目標であり、享樂遊蕩は繼續事にあたる新勢力を得る爲めの慰安にすぎない。此の得らるべき成功を彼は不覺にも失して居たのであつたが、幸に彼の意思は強固であり而も事の成る可能性は今尚彼方に彼を待つて居る事を知つたのである。今は躊躇すべき時ではない、一日の猶豫は正に一個の罪を犯す事であり如何なる犠牲を拂つても進まなければならないのである。彼の考は此處まで進行してハタと行き詰まつた。と言ふのは此の彼のの大計畫を如何にして實現するかと言ふ最も緊要な手段を彼は缺いて居たからである。具體的に言ふならば外國に行つて事業を開始する資金を如何にして得るかと言ふ點であつた。夫れは彼が數年間地道な收入から得た所をコックと貯蓄する事が第一の方法であらう。勿論彼も第一に之に氣付いたに違ひないの

であるが、此の考は彼の記憶に何の痕跡も残さず消え去せて了ひ其代りに急速な成功は急速な手段——英斷的手段——を以てしなければ得られないものではないと言ふ考が現はれて來たのである。英斷とは何か。業務上彼の手に委ねられる大金を其の最初の機會に於て拐帶逃走する事であつた。之は大罪である。刑法上の差別はともかく社會的に言へば夫は最早や彼がかつて行つた店からの窃盜の如き隠し終せ胡魔化し得且つ良心をくらし得る程度のもではなく、彼が社會から絶縁せられ犯罪として不滅の烙印を受ける罪である。此の事に直面して彼の心の奥底からは少年時代の彼の道徳心から展開した罪に對する戰慄——之は彼の第一第二の罪の場合に於て彼を苦しめたが——が今や其の残れる最後の力をふるつて湧き上つて來たのであつた。此の抑制力を征服する事が彼の第一の仕事であつた。之れさえ沈黙せしむれば最早や恐るゝ所はなかつた。と言ふのは彼は逮捕の恐怖、刑罰の苦痛に對する戰慄は一向に之を有しなかつたからである。以前の窃盜の場合に於てさえ發覺するに至らなかつたのであるから、此度の如き自國を立去り外國に至る場合には一層逮捕の可能性は薄いと彼は考へたのであつた。其處で彼は幾多の新らしい論法を編み出して彼の行動が正當である計りか出來得る限りを盡して必要な金を手に入れることは、外國に彼を待つ未來に對する義務に外ならぬと自身を説得したのであつた。一日飄然と歸國して兩親、友人又は故郷の町に黄金の雨を降したならば——勿論問題のケチな金などは早速に支拂つてしまふのだが——何人か彼を責むるを敢てせんやである。反つて万人は彼が若き折に危険を恐れる程卑怯でなかつた事を理由として彼を喝采するであらう。斯くて彼の心の準備は全くなくなり、某日主人が一万クローン封入の書狀の差立を彼に命じた時には彼は平然と夫を己が手に收めたのであつた。

大金を拐帶して本國を逃れ出て歐洲各地を流浪した後、ウインゲはスエーデンに來つたのであるが所持金は費消し盡し職を得る事は不可能であつた爲遂に絶体絶命の窮境に陥るに至つた。

此の窮境を脱し活路を開かんが爲めに彼は殺人罪を犯したのであるが、彼が拐帶逃走をなしたのは外國に於て新事業を開始する爲めであつたに拘らず、一度足を外國に踏み出して後は轉々各地を放浪するのみであつた。彼があれほどに熱望した大計畫は何處に行つたのであらうか。彼をして言はしむれば各地を放浪する間にあつても彼は決して此の大計畫を棄てる事はなく其の第一歩が斯くまで容易になし遂けられたのであつたから、爾後の成功も亦堅く之を信じて居たのであつた。只彼の計畫は大であるだけそれだけ準備を要し一步步其の地歩を築き上げなければならぬのである。従つて彼は各國の事情に通じ愈々事業を開始した際には此世に充ちた詐欺師等の手にのせられぬ様になつて居なければならぬのである。之れ彼の放浪生活の辯護であつたが、事情は意外の方面に發展し彼は思はざる窮境に陥つたのである。夫は彼が事業の共同者と頼んだ人物が彼の所持金を借り出して行方をくらまし先づ困苦の先觸れが來つたが彼はさほど失望しなかつたのである。と言ふのは彼は其の友人が自己を欺いたとは信ぜず一方又ある賣笑婦の用心棒となつてやゝ安樂な生活を送つて居たからである。然るに友人よりは音沙汰なく又賣笑婦との關係も或事情の爲め絶たれるや彼には眞の窮乏が來つたのである。

此の窮境を脱せんが爲め彼が計畫した事は偽名を用ひて彼宛の書留を差立て、配達夫が其を携えて彼の宿泊して居るホテルの彼の室に入り來つた際棒を以て毆打昏倒せしめて配達夫が郵便爲替の支拂の爲に携行する大金を奪ふと言ふのであつた。第一に配達夫の携行する金は之は國家のものであり彼が之を奪つた所で何人も之に依つ

て損害を被る事はないのである。即ち其金こそ彼が手に入れなかつたならば空しく泥土に委する彼の所有物の如きものである。第二に配達夫其人は如何、彼の受ける損害は單なる氣絶であり怪我もなければ別に不愉快な目にあはされるわけでもない。夫のみか配達夫は彼の行爲に依つて數日或は數週間其の厄介極る單調な仕事から解放せられるものであるから寧ろ彼に感謝すべきであらう。だが万一配達夫が息を吹き返さなかつたとしたらどうであらう。彼は此場合も考慮に入れ心の武装をかためたのである。配達夫は既に老齡であつて餘命いくばくもない。今死するとも何の悔ゆる事があらう。そののみか雨の日も風の日も朝晩町をあるきまはるのは老人に取つては寧ろ重荷ではないか。此の重荷から解放してやる事こそ彼のつとめであらう。況や彼は此の金を得る事に依つて輝やかしい前途を開拓し得るのであるから老人も冥すべきものと言はなければならない。斯くして彼は最後の罪を執行したのであつたが、直ちに逮捕せられ死刑の宣告を受け後に終身刑に減ぜられたのである。

さて既述した所から何人も氣付くであらうが彼の犯罪が重大なものとなればなる程彼の自己辯護の内容は簡單となつて來て居るのである。余は本稿の冒頭に於て彼はあくまで自己の行動に對する論理整然たる自己辯護を有するものであると言つたが、何等かの理由に依つて自己の周圍の狀態が變化するや彼の考へ方も直ちに變化する事を注意しなければならない。事情が好轉した場合は彼に於ては見られなかつたが、事情が悪化し切迫するに従つて彼の行動は益々本能的となり自己の行動に對して最初から整然たる論理を有する自己辯護をなす事なく先づ本能的に行動し或は行動を決意し然る後に其の行動に對する辯護の方法を取つて居るのである。例へば第一第二の場合に於ては周到緻密な論理を構成し他の事情を相當考慮に入れて居るに拘らず、第四第五の如き重大な犯罪

の場合に於ては事情の切迫と共に四周の状態に對しては殆ど盲目となり先づ爲さんと欲する所を定め次に夫を辯護する論法を他のあらゆる可能な論法を無視して採用して居るのである。

余は犯罪者と普通人との差異——勿論犯罪者のすべてではないが——は或る急迫した事情の下に於て其の本能的に取る行動が反社會性を帯びるか否かと言ふ點にあるものと信ずる。普通の状態に於ては犯罪者の行動も普通人の夫も別に差異はないが、一旦事情が緊急となるや兩者の差異は判然と現はれ前者の行動は反社會的な方向へと進むものである。

本稿に掲げた如き人物は正に斯る犯罪者類型の一例であるが、斯る犯罪者の中にあつても彼が特に特徴づけられる事はその本能的に反社會的な方向へ進んだ自己の行動に對して取る自己辯護の如何に論理整然たるものであるかと言ふ點である。彼が何故に斯る窮境に陥つたかに關する議論はしばらく措き、ともかくも窮境に陥るに従つて彼の行動は本能的となり或は本能的な行動が決定せられ、夫を實行に移す爲めにあらゆる熱情が浮かび更にかくの如き行動を辯護する爲めにのみ理性智力が驅使せられて居るのである。最後の場合に至つても尙理智力を有すると言ふ事は斯る犯罪者が通常以上の才能を有する事を示すものであるが、又その爲めに彼は常に自己の行動を正しきものと信じ自己行動のドグマを充分に組織して居るものなのである。従つてその性格は頑迷であり之を説伏する事は容易でなくその善導は殆ど不可能と言ふべきものである。即ち其の思考の方向を變化せしむる事は極めて困難なのである。斯の如き犯罪者の行動と自己の行動に對する信念の一例を示さうと言ふのが本稿の目的である。